

「場所」と「記憶」に関する方法の一考察

—横浜市南区 Y 商店街界隈の「場所の記憶」から—

藤原法子

A Study of Place and Memory

FUJIWARA, Noriko

I. はじめに

本稿は、横浜市南区にある Y 商店街界隈という場所において展開する異なる経験、異なる記憶、そして異なる人々、の交差を手がかりに、トランスナショナル・コミュニティの一つの位相を捉えようとするものである。トランスナショナル・コミュニティとは、人々の生きる世界が一つの国家、一つの社会を超えて形成されていることであるが、本稿では、そうした世界を「場所の記憶」を手がかりとしながら明らかにしていく。

シャロン・ズーキンはその著書『なぜ都市は魂を失ったか』において、「都市のオーセンティシティ」を形成する3つの質（「人々の質」、「ものの質」、「体験の質」）を提示しているが、ただし、「都市のオーセンティシティ」はその場の権利を得るための方法として使用され、パワーを持つための手段となっているとも述べ、オーセンティシティをめぐる衝突の問題、体験の消費の問題を示している（Zukin 2010=2013:7-16）。本稿で「場所」と「記憶」について考察していくうえで鍵となるのが、人々の経験や体験である。それはズーキンが提示する「都市のオーセンティシティ」の3つの質に当てはめた場合、特に「人々の質」と「体験の質」に関わるものである。前者は、その「まち」あるいはその「場所」での個々の人々の個々の経験の積み重ねあるいは組み合わせとしてその「まち」あるいはその「場所」を形作るものであり、後者は、その「まち」であるいはその「場所」で提供される一時の体験から浮上するその「まち」のあるいはその「場所」に付与されるイメージであるだろう。これら二つはそもそも質として異なるものではあるが、それと同時に、その「まち」における人々の異なる経験としてでもある。

また地理学者のドリーン・マッシーは、グローバリゼーションのもとで場所を捉えていくときの立場として3つのアプローチを提示する。一つは、「相互関係の産物として、つまりグローバルなもの広大さから密接で小さなものいたるまでの相互作用を媒介して構成されるものとして」（Massey, 2005=2014:24）認識することであり、二つ目は、「同時代の複数性という意味における多様性の存在可能性の領域として、つまりそれぞれ異なる奇跡が共存する異種混濁性の圏域として」（Massey, 2005=2014:24）理解することであり、三つ目は、「空間を常に構成の過程にあるものとして認識する」（Massey, 2005=2014:25）ことである。その上で、「情動的な要求」（Massey, 2005=2014:238）をめぐる衝突の問題を示す。

異質、多様な人々によって形成される場所を考えていくとき、その異質性や差異の多様さは、それぞれの意味づけやそれぞれの場所との結びつきゆえに、ズーキンが述べるオーセンティシティとしての「由来」がいくつも立ち上がりそれらの衝突を生じさせ、またマッシーが述べる「故郷^{ホーム}」との結びつきとしてのその場所をめぐる衝突を生じさせる（Zukin 2010=2013:16; Massey, 2005=2014:25）。

だが、異なる経験が必ずしも対立を生むわけではない。個別に積み重ねられてきた経験は、記憶として現在を意味づけるとき、その「場所」において何らかの重なりを持つ。その異なる経験、異なる記憶、そして異なる人々の異なるアイデンティティ、の交差のなかから「まち」の／「場所」の、どのようなローカリティやコミュニティに関する認識が立ち上がってくるのか、それを探っていくことを通して、トランスナショナル・コミュニティの一つの様相を明らかにすることが本稿の目的である。

II. なぜ「場所の記憶」を取り上げるのか

本章では、まず記憶をめぐるいくつかの先行研究に依りながら、「記憶」に注目することで何を捉えられるのかについて確認しておきたい。そのうえで、場所における記憶、「場所の記憶」が意味するものとは何か、について提示していく。

1. 「記憶」への注目

1-1. 想起ということ

アライダ・アスマンは、その著書『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』の序論において、「単数形の歴史という抽象的なジンテーゼに、今日では多種多様な、中には互いに矛盾しあう複数の記憶が対峙している。これらの記憶は社会的承認を求めて自らの権利を主張しているので、それぞれが独自の経験と要求を持つこれらの記憶が、現代文化において、闘争の繰り返される決定的に重要な領域となったことを否定するものはいないだろう」(Assmann 1999=2007:29)と述べ、現代社会に生じている出来事を捉えていく一つの重要な手がかりとして記憶を取り上げる。

またアスマンは、記憶というテーマを取り上げていくにあたって、これまでは文芸学における「記憶術」に関する研究として取り上げられてきたが、そこで取り上げられてきた記憶とは、正しく覚えておくという意味での記憶であり、そのままの形で蓄えるための「〈技〉としての記憶」であるが、問題となっている記憶とは、想起と忘却をめぐる動きであると述べる (Assmann 1999=2007:42-45)。アスマンは、F・G・ユンガーの「記憶」と「想起」の概念的区別を紹介しながら、「想起は、原則として再構成する行為だ。それは常に現在から出発するため、想起の対象が呼び戻される時、その対象はずらされ、変形され、ゆがめられ、再評価され、更新される」(Assmann 1999=2007:44)のものであり、それは「〈力〉としての記憶」であり、「事後的に初めて意識される何かが、われわれに思い起される」ものであると述べる。

そしてこの想起するということは、常に「私」や集団がどのように社会のなかに位置づけるのか、意味づけられるのかというアイデンティティとの連関として生起するとし、社会によって記憶されること、社会によって記憶が形作られることを「歴史」と「記憶」の関係として考察している (Assmann 1999=2007:158-162)。「歴史」と「記憶」の関係について、モーリス・アルヴァックス

は「集合的記憶」の点から「記憶」すなわち「集団の記憶」が「安定していることが、集団の構成と存続に直結し」、集団のアイデンティティを確保するが、「歴史」はアイデンティティを確保する動きを持たない (Assmann 1999=2007:159-160)とし、「歴史」と「記憶」を区別すると述べる。またピエール・ノラの研究から、「集団による記憶」すなわちいかに集団によって記憶が共有されるのかについて、集団の記憶の背後にあるのは、社会が使用する記号やシンボルであり、この共通のシンボルを介して、共通の記憶と共通のアイデンティティを分かちあうことが可能となり、「空間と時間をこえてシンボルを介して自己を定義する抽象的な共同体」による共通の記憶と共通のアイデンティティが共有されることになると述べる (Assmann 1999=2007:161)。そして記憶を「住まわれた記憶」と「住まわれざる記憶」とに分ける。前者は、何らかの担い手と結びついた記憶であり、選択的である一方、後者は、特定の担い手とは切り離され、すべてが均等の記憶として存在するものである (Assmann 1999=2007:162)。

さらにアスマンは、「住まわれた記憶」を「機能的記憶」と、そして「住まわれざる記憶」を「蓄積的記憶」と名づける (Assmann 1999=2007:163)。この二つの記憶の関係は、アルヴァックスが提示するような「歴史」と「記憶」という二項対立的な関係を取らないという。蓄積的記憶とは、機能的記憶を取り囲む、まだ使用されていない、つまり現在との関係において、あるいはその個人や集団との、社会との関係において意味づけられていない大量の記憶の資源である。それゆえに、機能的記憶として選択される、意味づけられる可能性を常に孕んでいるものとしてあるからである。それは機能的記憶と蓄積的記憶が、相互に交換可能であり、再編成可能なものとしてあるということである (Assmann 1999=2007:163-170)。

1-2. 社会が記憶するという事

ポール・コナトンの研究は、記憶の社会的形成、記憶の共有を可能にする伝達行為を記念式典と身体の実践から明らかにしようとするものであるが、そこで提示されている記憶とはどのようなものか。

コナトンは、記憶を分類するにあたり「記憶の主張」として捉え、個人の記憶の主張、認知の記憶の主張、そして習慣の記憶の主張の3つに分類する。個人の記憶の主張とは、自らの過去についての語りを指し、認知の記憶の主張とは、記憶の認識を持っていることであり、習

慣の記憶の主張とは、ある特定の事柄（例えば読み書きや自転車に乗るといった日常的に行われるさまざまな行為）を行うことができるか否かということである（Connerton 1989=2011:36-39）。ただし習慣の記憶は、機械的な行為の反復にとどまるのではなく、社会的慣習によって「正しい」行為が決定されるとし、社会的に遂行されるものとして社会的慣習の記憶を提示する。このことが、社会が記憶すること、すなわち社会が記憶を共有する鍵となる。そしてその媒体が、記念式典であり、身体であるとコナトンは述べる（Connerton 1989=2011:63-69）。

2. 人々の経験の堆積としての「場所の記憶」

アスマンは、「場所の記憶」という言葉を使うことについて、場所についての記憶が問題となっているのか、場所自体に局在している記憶が問題になっているのかを未確定のままにするものであると述べる（Assmann 1999=2007:355）。

ゲーテの手紙を例にとり、「わたしの祖父の家屋敷と庭園のあった場所」が、個人をはるかに凌駕する記憶を体現するものと述べ、「個人の記憶は家族の記憶に向けて拡大される。つまりここでは個人の生活の圏域が、この圏域に属してはいるがもはや存在していない者たちと交差するのだ」と指摘する（Assmann 1999=2007:356-357）。

またアスマンは、「記憶」が「不断に堆積することでも、想起の空間には<深さ>の性質が生まれ」、それは「思いがけない再生や蘇生を可能にする」とも述べる（Assmann 1999=2007:485）。このことは、その場所における異なる人々の、異なる経験の、異なる記憶の堆積としての「場所の記憶」の重要性を提示する。

では本稿で対象とするY商店街界隈における「場所の記憶」とはどのような人々のどのような「記憶」なのだろうか。

Ⅲ. 周縁という場所のオーセンティシティ —Y商店街界隈—

1. 周縁をめぐる「場所の記憶」と方法論

この地域はいわゆる「推移地帯」としての様相を示している。地理的にも空間的にもさまざまな周縁としての位置にあり、またその周縁性ゆえにさまざまな人々を集める場所ともなっているし、なってきたと言えるだろう。

関内・関外を一つの範域としてみると、海に向かって

アルファベットのUの字を置いたように、Uの字の縁の部分に沿って高台に囲まれた空間として浮かびあがってくる。高台に囲まれた部分は、かつての埋め立てによってつくられた吉田新田であるが、その埋め立てて造られた低地の両端の縁の部分に西から東へと大岡川と中村川という2本の川が流れている。北側に大岡川が、南側に中村川が位置し、この中村川沿いに本稿が対象とする地区（Y商店街界隈）がある。

この埋め立て地には現在でも多くの「橋」の付く駅名、交差点名が見られるように、大岡川と中村川を南北に結ぶ水路として多くの川が流れていた。Y商店街界隈と接する伊勢佐木町との間は、現在は大通り公園と呼ばれる緑地帯があるが、かつては吉田川と呼ばれる川を埋め立てて造られてものである。こうした川には昭和50年代くらいまでは多くの船が係留され、水上生活者も暮らしていた。

中村川沿いには、かつてドヤ街が形成され、現在でもいくつかの簡易宿泊所が立ち並んでいる（神奈川県愛泉ホーム 1972）。

そもそも寿東地区とは、万世町、永楽町、真金町、高根町、白妙町、浦舟町の6町からなる地区であるが、その中の永楽町と真金町はかつて永真遊郭と呼ばれた遊郭があった場所である。戦前までは遊郭として、戦後は売春禁止法の施行にともなってカフェや旅館などに転業して営業が続けられたが、現在はその跡形もなくマンションの立ち並ぶ住宅地である。筆者らの聞き取りでは、こうしたマンションが増え始めたのが10年ほど前からであり、そこに中国人が多く居住するようになってきているとの近隣住民の話やマンションの半分以上が外国人の居住者である、マンションのオーナー自体が中国人であるといった話が何人かの人々から聞かれた¹⁾。

またこの地域は関東大震災での被災、第2次世界大戦での建物疎開などもあり、これまで町としての人の入れ替わりが何度となく繰り返されてきた地域でもある。

Y商店街界隈の近辺には黄金町や曙町などの歓楽街があり、そこで働く外国人女性の居住地にもなってきた。またもともと「韓国の人が多い」との話があるように、在日韓国朝鮮人の人たちの集住地も近くに位置する地域でもある。2000年代以降はニューカマーの韓国人の増加、それに遅れて中国人が増加している。この地域の一角には、中華街へ卸す食料品を作っている工場もある。

多様な人々が入れ替わりながら、集まってくる地域である。

ではこうした場所や人々の記憶をどのように捉えていくのか。都市エスニシティ研究においてそれは、そうした場所においてつくられる人々の世界、すなわち都市的世界がどのように形成されているのか、どのように成り立っているのか、について明らかにされてきた。

都市エスニシティ論がその手がかりの一つとしてきたものとして、広田康生はその著書において、『『トランスナショナル・コミュニティ』が『結び目としてのエスニック施設』や地域施設を核として、ときに『非在』の『社会的凝集』として編成される点で、グローバル化の中での都市的世界論と結びつく』とし、その「都市的世界論は、時代的には、L・ワースのアーバニズム論、磯村の第三空間論、そしてC・S・フィッシャーの下位文化論を経て、現在は『都市のオーセンティシティ』『都市の権利』をめぐる闘争の場として展開」（広田 2016: 240-242）すると述べる。そして「特定の具体的な、越境移動の拠点となる『場所』に、越境する人々と『共振者』の実践による『境界領域』あるいは『脱構築』の過程を生み出すことで、都市的世界性を高める。『場所形成』の過程は、『結節点としてのエスニック施設』や『サードスペース』を中心に、個々の、多様な『場所のオーセンティシティ』や『都市のオーセンティシティ』同士の衝突や交渉を生み出す。これらの動きは、その『場所』に埋め込まれたさまざまな関係性や複数の結合原理を明るみに出し、その意味を改めて考えさせる契機になる」と述べる（広田 2016: 242）。本稿で対象とするY商店街界隈において、「場所の記憶」に注目した時、「結び目となる施設」あるいは記憶の中核となる施設として「都市遊郭」「カフェ」「神社」が挙げられる。これらが周縁という場所のコミュニティを結節する施設といえるだろう。

では、こうしたコミュニティを、そこに作られている社会的世界をどのように把握することができるだろうか。ハーバート・J・ガンズ（Herbert J. Gans）は、『都市の村人たち』において、イタリア系アメリカ人の仲間集団という観点から、その社会的世界の構造を分析している。また広田は、1990年代の横浜市鶴見区に展開した日系ブラジル人や共振者によって形成される社会的世界を分析する際に、A・ストラウス（A. Strauss）の「社会的世界概念」を取り上げ、「今まさに生成過程にある社会的集合体を、しかも本書での用語をつかうならば、きわめて状況的にその境界やメンバーシップが形成される、そうした人間集合を単なる類比概念以上の『社会的実体』として、その分析を試みている」と述べ（広田

2013: 84）、そうした世界を構成する「主体類型」の分析としてD・アンルフ（D.R. Unruh）の議論を挙げる。そこでは「その世界をめぐる最も本質的な知識から、その世界をある程度は知っている人たちのための知識、そしてたまたまその世界に接近する人が知り得る知識まで同心円状をなして」おり、「異邦人」「移動者」「定住者」「内部者」という「社会的世界に関する知識への接近性によって」カテゴライズされるアンルフの主体類型を提示している。

本稿では、Y商店街界隈に展開する社会的世界を、その社会構成の概観を捉えたうえで、「場所の記憶」の中核となる施設「都市遊郭」「カフェ」「神社」に対する感覚や距離感を手がかりに、社会的世界を構成する人々の一端をみていく。人々のどのような衝突や交渉が展開しているのか。またそこにはどのような関係性や結合原理が見えてくるのか。

2. 異なる経験、異なる記憶の交差と周縁の構造

本稿で取り上げる横浜市南区Y商店街界隈は、横浜市南区と中区とが接するあたりに位置する。この商店街は、一見、ごく普通の昔ながらの賑やかさを残す商店街のように見える。しかし、商店街のなかを歩いて行くと、中国語やハングルの看板や張り紙が貼られた店舗が点在し、その店先では、中国語やハングル、東南アジアの国々の言葉が交わされていたりする。近隣にある小学校の下校時になると、日本語と中国語のちゃんぽんで話しながら歩いてくる小学生の一群にもしばしば出会う。商店街の人々のなかには、「ここは7割くらい外国人」と話す人もいるほど、「外国人」の多い地域でもある。平成27年の国勢調査によれば、この地区（Y商店街を含む6町で構成されている）の居住者の総数は14,123人、うち外国人数は2,105人であり、居住者数の約15%を占めている。町丁別でみると居住者数に占める外国人の割合が20%を超える町丁もある。商店街での聞き取り調査では、マンションのオーナー自体が外国人で、「住人のほとんどが外国人というマンションもある」という話や、住人の半数が外国人といったマンションも多く、「会費も払ってもらえないし、町内会自体が成り立たなくなっている」など、統計数値以上に地域に外国人住民が増えているという認識がある。

横浜市では、この地域の国籍・出身地域別の外国人数や割合などの統計は出していないため、正確な数字はわからないが、商店街での聞き取り調査からは、戦後以降のおおまかな状況が見て取れる。商店街の人々の側から

の「地域における外国人の変化」をみてみたい。

まず最初の時期は、戦後以降1980年代までであり、地域を構成する人々は、「昔から住んでいた人たちが」が基本であり、「外国人」はこの地域のなかというよりもその周辺地域に居住する人々で、その多くが在日韓国朝鮮人の人々である。商店街としてはその人たちとの客と店との「日本人と変わらない」つきあいがなされてきた。それ以外は、船員として一時的に滞在しているロシア人の買い物客が珍しい「外国人」として認識されている。

1980年代以降は、この地域の近辺にある歓楽街で働く外国人女性が急激に増えた時期である。聞き取り調査でも川沿いのマンションにフィリピンからの女性たちが多く暮らしていたとの話が何人もの人から聞かれた。

第三の時期は1990年代以降、ニューカマーの韓国人が増加する。聞き取り調査においても「ずっと住んでる人たちは日本人と変わらないけど、彼らは日本語を話さないし」と、これまでとは異なる外国人の増加を認識している。さらに2000年代以降は、この地域においてマンション建設が進むが、その居住者として外国人特に中国人が増加する。

この地域においては、累積的に外国人が増加しているというよりも、その国籍・出身地域が変化しながら、その人数が増加している。特に近年増加している要因の一つとして、聞き取り調査からは、中国人の家族での居住、さらにはそうした家族における子守のために祖父母の呼び寄せといったことが挙げられている。

外国人の変化とともに、この地域の変化についてもみておきたい。

この地域は、「都市遊郭」を配することで、賑わってきた地域でもある。無論遊郭としては、戦後の売春禁止法の成立とともにその姿を消していくことになるが、その名残は「カフェー」や「旅館」、あるいは「料亭」「料理屋」等々の施設が数多くあることで、この地域を特徴づけていたといえるだろう。しかしながら、1960年代以降、横浜市における河川の埋め立て、地下鉄建設工事等により、地域の位置づけが大きく変わっていく。横浜の中心市街地に接する地域として、住宅を供給する地域として位置づけられるようになってくる。そうしたなかで、住民の世代交代とともに、マンション建設が進み、遊郭を中心として、そこに付随する商店街という構造から、商店街を中心としてそのまわりに広がる住宅地という構造へとこの地域の様相は変化している。

本稿における「場所の記憶」の中核となる施設である「都市遊郭」に対する感覚や距離感から、ここでの社会

的世界を構成する人々をアングルFの主体類型を参考に分類してみると、「当事者」「なかの人」「周囲の人」「外部者」の4つが考えられる。「当事者」とは、「都市遊郭」そのものに直接関わっていた人々およびその関係者。「なかの人」とは、本稿で取り上げるが、「都市遊郭」のそのなかにいながらも、遊郭関係者としては部外者としての位置にある人々。「周囲の人」とは、「都市遊郭」の外にあって、しかしながら「都市遊郭」を中心とする地域のなかに暮らす人々。「外部者」とはこの地域以外の人々であり、ときにこの地域にやってくる人々のことである。

上記のこの地域を構成する人々は、これら4つの分類からするならば、現在ではごくわずかの「当事者」と「なかの人」、「周囲の人」としての日本人住民およびエスニシティ、そして「外部者」から「周囲の人」との境界に位置するであろうさまざまな外国人住民からなっているといえるだろう。そしてこの多様な「周囲の人」および「外部者」と「周囲の人」の間に位置する人々との、異なる経験や異なる記憶のぶつかりと重なりはどのようなものなのだろうか。

3. “なかの人”の記憶と異なる経験との対峙

では、こうした地域の変化のなかで、「場所の記憶」を手がかりとして、どのような社会的世界が形成されているのだろうか。

本節では、“なかの人”の場所の記憶と現在の多様な異なるものとの交差の経験のその一端についてみてみたい。本節で取り上げるA氏は、この「都市遊郭」の一角で生まれ育ち、現在もこの地に住んでいる80代の男性である。

<“なかのひと”>

“なかのひと”とはA氏の言葉であるが、A氏は、この地域について「ここは廓で育った町であり、廓のことを「なか」と言ってきた。そこに住んでいる人たち、自分たちのことを廓の人と書いて、なかの人と呼んできた」。この地域は、「廓を愛してきた人たちが多くいたし、そういう人たちによって成り立っていた場所だった」し、住民が代替わりするなかで「当時のことを知っている人はもう3割もない状況」だと話している。

A氏自身の家は、A氏の言葉を借りれば廓の関係者ではなかったが、「都市遊郭」のなかで、その「当事者」である人々、その子どもたちが自分の友人であり、「都

市遊郭」という場所を自分も「当事者」と同じように自分たちの場所、まちとして愛着をもって暮らしてきた。

現在では、この場所の遊郭としての歴史を知る人も少なくなり、日常生活をしているなかで、差異を感じることはほとんどないが、かつては特に「外部者」である人々からは、「遊郭の子だから」「うちの子とはつきあわないで」といったことを言われたこともあると話している。また商店街について話を聞くなかで、もともとは遊郭によって賑わっていたところだとの話があり、「なか」とそのまわり「周囲」との「都市遊郭」との距離感の違いが浮かび上がってくる。無論それは「周囲」としての商店街も同様で、かつては「都市遊郭」に関連する店（布団屋、呉服店、化粧品店など）が多くあったが、現在ではなくなってしまっていることや、神社のお祭りのときには商店街も賑わうが、それ以外、現在は関係はない、わからないといった認識であり、かつての「都市遊郭」の存在自体は認識しながらも、そことの結びつきを特に意識しているわけではないという「なかの人」のA氏とは異なる距離感が見えてくる。

この距離感の違いは、この場所に対する認識の違いでもあり、「はじめに」で述べたズーキンやマッシーが提示する場所における衝突や闘争をときに生じさせるものでもある。ではこうした差異や違いをA氏はどのように考えているのだろうか。

<異なる経験との対峙>

A氏は、この場所との結びつきのひとつとして、この地域の神社の役員としての仕事を担っている。その仕事のなかで、神社への参拝者の賽銭から地域の変化を感じているという。「ここ10年くらい特に顕著だが、34か国もの国のお金（硬貨）が賽銭として入れられている」と話す。もちろん観光客によるものもあるが、「地元で生活している人として外国人が多いことをそんなことから感じている」のだという。「確かに外国人が増えて大変だという話はある。だが、必ずしも外国人うんぬんということだけではない。地元に住んでいて、そのなかで互助をどう考えるのかという問題。外国人に限らず『地元』という気持ちがありませんというのが現状」とA氏は考えている。そうしたなかで、神社の祭りをとおして地域を知ってもらう活動を行っている。この地域の小学校としてB小学校があるが、ここには全校児童の52%となる外国人の児童が在籍している。日本人の児童のほとんどもこの地域の「都市遊郭」をめぐる「場所の記憶」を持っていないし、外国人の児童たちも同様であ

る。こうした学校の社会科見学の際には、「文化のはじっこを知ってもらおう」ということで、日本の文化の一つとして神社を紹介したり、地域の歴史の一つとして神社の祭りを紹介したりするなど、「周囲の人」「外部者」にあたる人々を含めた人々との、異なる「場所の記憶」を持つ人々とのあいだで、自らの「場所の記憶」を提示するを通して、何らかのつながりや重なりを作っていくようにしている。それは異なるものを認めながら、異なるもの同士を接合していくひとつの試みといえるのではないだろうか。

IV. 異なる経験、異なる記憶、異なる人々の交差から浮かび上がるもの

アスマンは、その著書『想起の文化—忘却から対話へ』において、ドイツにとってのホロコーストを想起するということをめぐる議論を展開しているが、そのなかで「想起の文化」という概念が表す3つの意味を提示する（Assmann 2016=2019, 28）。一つは、「想起の文化とは、過去へのアプローチが多元化して強まったことを指し示している」ということ。二つめは、「集団が過去を自分たちのものにすること」を意味していることであり、それをニーチェを引用しながら3つの場合として示している。①記念碑的な想起、②好古的な想起、③批判的な想起である。三つ目として、「倫理的な想起の意味を付け加えること」を意味していると述べる（Assmann 2016=2019, 28）。アスマンの述べる想起や記憶と本稿におけるそれとは、その想起する対象や記憶の対象としての出来事の大きさが全く異なっており、ここでの議論がそのまま当てはまるものではない。ただ、そこで問題となっているのは、その記憶を持たない人も含めて、異なる経験や記憶を持つ人も含めて、異なりながらも結びついていけるのか、いかに重なっていけるのかということでもある。その一つとして、アスマンはマイケル・ロスバークの「マルチディレクショナル・メモリー」を提示する。それは記憶の結び合わせということであり、「歴史を想起することは、新しい社会的・政治的アイデンティティが生まれる媒質になる。(……) (マルチディレクショナル・メモリー) というモデルは、文化的アイデンティティの排他的形式に対しては安全距離を保ち、いかに想起が異なる空間、時代、文化の場所を横断し、それらを結び合わせることができるかを示す」と述べている（Assmann 2016=2019, 1991）。

Ⅲ説で提示したA氏の事例は、アスマンが対象とするような大きな話ではない。しかし、ロスバークの記憶

の結び合わせと、接点を持つものと言えるのではないだろうか。個々の人々の「場所の記憶」を接合していくことをとおして、その異なりを異なりとしながらも、そこにつながる契機を見つけていくことの可能性がひらけていると考えている。

<文献リスト>

- Assmann, Aleida, 1999, *Erinnerungsräume. Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*, München : C.H. Beck. (=2007, 安川晴基訳『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』水声社.)
- Assmann, Aleida, 2016, *Das Neue Unbehagen An Der Erinnerungskultur (Eine Intervention 2nd ed.)*, Verlag : C. H. Beck. (=2019, 安川晴基訳『想起の文化—忘却から対話へ』岩波書店.)
- Connerton, Paul, 1989, *How Societies Remember*, Cambridge : Cambridge University Press. (=2011, 芦刈美紀子訳『社会はいかに記憶するか—個人と社会の関係』新曜社.)
- Halbwachs, Maurice, 1950, *La mémoire collective*, (=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.)
- 広田康生, 2016, 「第8章 『トランスナショナル・コミュニティ』と都市社会学—都市的世界／コミュニティ／エスニシティの新たな展開に向けて—」 広田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ—場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社. 230–245.
- 広田康生, 2013, 『新版 エスニシティと都市』有信堂.
- 神奈川県愛泉ホーム, 1972, 『昭和46年度社会調査報告書 中村の街とドヤ—その現状と展望—』神奈川県愛泉ホーム.
- Massey, Doreen, 2005, *For Space*, Sage. (=2014, 森正人・伊澤高志訳『空間のために』月曜社.)
- 専修大学人間科学部藤原法子研究室, 2018, 2017年度「社会調査実習」報告書『場所に埋め込まれた記憶と地域社会における異質性、多様性をめぐって—横浜市Y商店街での聞き取り調査から—』(非売品)
- Zukin, Sharon, 2010, *Naked City : The Death and Life of Authentic Urban Places*, Oxford University Press. (=2013, 内田奈芳美・真野洋介訳『都市はなぜ魂を失ったか—ジェイコブズ後のニューヨーク論』講談社.)

付記

本稿は、専修大学の平成23年度研究助成の研究成果の一部である。記して謝意を表したい。